慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ほんとうの豊かさとは
Sub Title	
Author	本橋, 成一(Motohashi, Seiichi)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2005
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2005.) ,p.181- 203
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	冊子掲載の内容を一部修正したもの
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20050000-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ほんとうの豊かさとは

写真家・映画監督

本橋成一

一九六三年自由学園卒業。同年より九州や北海道の炭坑の人々を撮り始め、六八年作品集『炭鉱〈ヤマ〉』で第五回太陽賞受賞。九一年事故後五年を経たチェルノブイリ及び周辺の被災地に通い始める。九五年原発事故被災地で暮らす人々を撮影した『無限抱擁』で日本写真協会年度賞、写真の会賞受賞。九七年被災地ベラルーシを舞台にした『ナージャの村』を映画と写真集で映像化。九八年写真展『ナージャの村』で第十七回土門拳賞受賞。二〇〇二年第二作目の映画『アレクセイと泉』公開。同年東京都写真美術館で写真展チェルノブイリ三部作『ナジェージダ〈希望〉』を同時開催。映画『アレクセイと泉』は各国の国際映画祭で数々の賞を受賞。「バオバブの記憶」製作中。主な写真集に、『上野駅の幕間』（八三年 現代書館）、『ふたりの画家』（八七年 晶文社、〇五年新装再販 ポレポレタイムス社）。写真絵本『アレクセイと泉のはなし』（〇四年 アリス館刊）などがある。

『アレクセイと泉』映画あらすじ

映画の舞台は、一九八六年四月二十六日に起こったチェルノブイリ原発（旧ソ連・現ウクライナ共和国）の爆発事故で被災したベラルーシ共和国東南部にある小さな村ブジシチェ。かつては人口六百人ほどの村だったが、原発事故後の強制移住政策でほとんどの住民が村を去り、今では五十五人の老人とひとりの青年・アレクセイだけが住んでいる。

映画はアレクセイの語りで進んでいく。冬の屋内での作業。冬の朝早くペチカで作るブタのエサと朝食のパンケーキ。夏にガチョウやニワトリなど家畜にエサをやる風景。アレクセイの父母の昔話。年金支給。町からやってくる移動販売車での買い物。パーティ。麦刈りやジャガイモ掘り。夏休みになると、町に移り住んでいる子供や孫が帰ってきて、ジャガイモの収穫を手伝う。汚染から免れた隣り村では祭りも昔通りに行われている。夏にはリンゴ祭り。冬には十字架祭り。昔と変わらないだろうブジシチェの暮らしが淡々と描写されていく。

村には泉がある。村の人びとは天秤棒とバケツを使ってこの泉から飲料水や生活用水を汲み上げ、洗濯もこの泉でする。映画の中では、「もうどうせここには長く住めないから」と腐ったまま放ってあった泉の木枠を男たちが修理し始める。それは久しぶりに収穫祭に司祭が来てくれるから。森から木を切り出し、枠を作り、上手に組み合わせて作り上げるが、この修理が最後だとわかっている村人たちは同時に淋しさも感じている。

この泉こそがブジシチェの村人たちの暮らしを支えている。そして村人が危険なこの村を離れない

のも、この泉があるからだという。森も、川も、土地も放射能に汚染されたが、不思議なことにこの泉の水からだけは放射能が検出されない。それはこの泉の水が、何百年もたった水が大地の中から湧いてきているものだからだ。

「アレクセイの村」との出会い

今日はお招きいただき、どうもありがとうございます。

ぼくはもともと写真を撮っている人間なんですが、チェルノブイリの災害にあったところを訪ね歩くようになり、そこで写真集だけでなくて、映画を二本ほど作りました。世界数多い著名な写真家や映画監督の中でも、ひとつのテーマで写真と映画の両方を撮った人はあまりいないのではないかと思っています。それだけがぼくの自慢になっています。

ぼくは、日本の戦後の高度成長の真っ只中で育ちました。東京大空襲にもあっています。その怖かった経験もあるし、日本が戦争に負けて丸裸になったときも知っています。さらに、一九六四年の東京オリンピックをきっかけにして、日本中が物質的に豊かになっていった時代に育っていった人間でもあります。ですから、ものの豊かさにはとても憧れた人間でした。

しかし、学校を卒業して、写真の学校に行き、仕事として写真を撮り始めてから、だんだんと「この豊かさは一体なんだろう」と思うようになりました。ぼくの写真のテーマは「豊かさとは」という自分

への問いかけでもあったような気がします。

だから、一九八六年にチェルノブイリで原発の爆発事故が起こったときには、ぼくはとても気になりました。原子力が何だということさえもろくに知らないくせに、「ともかく一体この事故は何だったんだろうか」ということをぼくなりに考えました。ただ、ぼくは報道写真家でもないし、事件記者でもないし、ホットなものを撮るのはとにかく苦手なんですね。チェルノブイリを撮ってみたらと、いくつかの雑誌の仕事で誘われたのですが、何しろテーマがあまりにも大きすぎてどう映像で語れるか難しくて、お引き受けしていませんでした。

それから五年後の一九九一年、松本にチェルノブイリ連帯基金という医療支援を中心とするＮＧＯが立ち上がりました。そのＮＧＯにはぼくの友人たちも係わっていて、「パンフレットやニュースレターなどの写真が必要なので、お前、手伝えよ」という話になって、「ボランティアだったらやってもいいか」ということで始めたのが、九一年春のことです。

大切なものがここにはある

チェルノブイリでは実際に四号炉をはじめ、放射能に病んだ子どもたちを病院に見舞いに行きました。しかし、どういうかたちでこのことを伝えられるかということを考えると、半ばあきらめというか、ぼくにはとても撮れないだろうなと思っていました。

九一年にソ連邦が解体して、いくつかの国が独立しました。チェルノブイリは今ではウクライナ共

和国に属し、ぼくが通い出したチェチェルスク州はベラルーシ共和国という国になりました。チェチェルスク州はチェルノブイリ原発から一八〇キロメートル離れているのですが、当時の雨と風とで放射能が運ばれて、調査に当たった専門家の話によると、放射能の七〇％近くはその地域に落とされたという、高汚染地域です。そこは一四九町村でなっていますが、多くの村は汚染の強さによって、強制移住地区だったり、移住勧告地区に指定されています。

信州大学の医学部の第二外科と小児科の学部の先生たちが地域病院の検診などに行く際に、ぼくも同行しました。最初は、汚染地区というから草木も生えないようなすごいところかと思っていたのですが、全く違っていました。ちょうど五月で、ジャガイモの植え付けの時期で、リンゴの花などいろいろな真っ白い花が咲いているんです。四号炉を見たり、小児病棟で抗ガン剤に苦しんでいる子どもたちに会ったりした後だったので、本当にいのちが見えるというか、汚染されていてもまだいのちが見える場所があったことに感動しました。最初は二度と来るところではないと思っていたのですが、それから映画制作もはさんで、結局十五年間にわたってもう三十数回、その地に通う結果になりました。

ベラルーシでは最も汚染されていた場所なのに、ここには逆にぼくたちが失したものがあったのです。ぼくが高度成長の中で、ひとつの物質的な豊かさを得るために失していった大切なものがたくさんある。もちろんものだけでなく、生き方においてもそうでした。それがわかって、この原発被害を日本のみんなに報告するということではなく、逆に彼らの生き方というか、暮らし方を見せたいと思うようになりました。社会主義国家なので、いい意味で物質文化があまり入り込んでいなかった。だからこそ非常にまともな暮らしがあるんですね。ぼくの子ども時代や、それ以前の暮らしというか、おそらく人間はこ

ういう暮しをずっと続けてきたんだろうな、と思いました。その暮らし方をみんなに見せたい、見てほしいということで、三冊の写真集と二本の映画、そして三冊の子供たちに向けた本を作りました。

この村ではぼくたちのように電気の恩恵にほとんど授かっていません。洗濯機や冷蔵庫があるわけでもなし、テレビは最近になり徐々に買えるようになっていますが。そうした、ほとんど電気というものの恩恵にあずかっていない彼らに原子力発電所の被害が舞い降りてきたわけです。本当に皮肉な話だと思いました。原子力発電所の発電は、みんなの暮らしを豊かにしたいという考えから、発明され、発展してきたものです。もちろんぼくの上にも降ってきてほしくはないのですが、わが家でもすごく電気を使っているし、これだけ使っていれば、もうそろそろ降ってきても仕方がないのではないか、とも思います。

しかし彼らは電気製品がないことが貧しいことだとはまったく思っていません。ぼくは豊かさの原点を彼らから教えてもらった気がします。もちろん放射能で汚染されていますから、家族もバラバラになってしまっていたり、立ち入り禁止のところもあったり、ともかくそういうことではかつての暮らしが壊されてしまった悲劇は確かなんですが、でも、政府の勧告に逆らってそこに居座ってしまった彼らの暮らしをみんなに見せたいと強く思うようになりました。

水をお借りする、水をお返しする

『アレクセイと泉』という映画はぼくが撮った二作目の映画です。九三年に、放射能汚染地なのに、

泉の水からは放射能が測定されないという場所があると聞きました。チェチェルスクの保健局では、汚染された場所を一カ月に一度、定期的に測定してデータを取っているのですが、そのデータを見ても、村のあらゆるものが汚染されているのに、泉の水だけは汚染されていないのです。ぼくはその話を聞いて、その村に行きました。そこで、村人たちに「なぜ、泉の水だけは汚染されていないのか」と聞くと、「これは百年前の水だから大丈夫なんだ」と当然のことのように言うんですね。百年前が本当に百年前なのか、ひょっとすると千年前なのか、あるいは三十年前かというのはよくわからないのですが、ぼくの友人の専門家によると、日本にも地下水が百年千年経って湧いて出てくるところはたくさんあるのだそうです。村人たちが言う「百年前の水」とはまんざら間違いではないんですね。泉の水からは放射能がまったく測定されないわけですから。

そのひとつの泉があることによって、彼らは心とからだが癒されているんです。ご承知のように、ソビエト連邦共和国時代は宗教を圧しました。いろいろな村に行きましたが、教会のある村はあまりないのです。アレクセイの住んでいるブジシチェ村にも、教会はありません。ですがその泉が教会がわりになっているんですね。水は世界中どこでも宗教につながっていくのですが、その村でも泉が教会のかわりになり、十字架が立てられ、祭りごとが行われたりしています。

ぼくは先ほど「いのちが見える」と抽象的な言い方をしましたが、ぼくが映画を撮り出したときには、村にはアレクセイを除くと五十五人の村人しか残っていませんでした。六十五から九十歳、平均すると七十五歳ぐらいのお年寄りたちがそこに暮らしているのです。かつてはソホーズ（大規模国営農場）があり、三百世帯六百人が住んでいました。ぼくは彼らに「どうして村を出ていなかったのか？」と聞き

ました。息子や娘たちは、町の中に住宅がもらえて、多少の立ち退き代ももらえたので、みんなとっとと村を出て行ってしまったのです。彼らに「どうして息子さんや娘さんについていかなかったのか」と聞いたところ、ほとんどみんなが「村を離れてしまうと、いのちをお返しするときに、この村に水もお返しできないからいやなんだよ」と言うんですよ。

最初はどういうことか、ピンと来ませんでした。「ああそうか、すごいな」と思ったのは、つまり「水をお借りしている」という考え方なんですね。「水をお借りしている」という考え方なんかぼくはとっくになくしています。人間のからだの七割は水だそうです。五十キロの方でも、そのうち三十五リットルは水なんです。お借りしているっていう発想はすごいでしょう。

それから水に興味をもって、いろいろな本を読んでわかったのですが、地球上で生きものが「借りられる水」というのは、全体の〇．〇〇二～〇．〇〇五％程度しかないんだそうです。それをすべての生きもの、人間やネズミ、ブタなど動物と、植物も、みんなで借り合っているわけです。そして毎日汗や尿など排出物で返していく。そうするとまた蒸発して雲になって雨を降らし……というように、昨日までぼくの体内にあった水がまた生きものの間を巡回していくのです。

さらに「いのちをお返しするときに、またその水をお返しする」という発想が、またすごいなと思いました。今、スーパーマーケットなどに行くと世界中の水を売っていますよね。カナダから、オーストラリア、フランス、富士山の水までさまざまな土地で採れたペットボトル詰めの水をぼくたちは買って飲んでいるわけです。そうすると、ぼくがいのちをお返しするときは忙しい。いろいろな場所に返さなくてはいけないわけです（笑）。

二〇二五年には水も不足

水を買うということは、今のぼくたちにはもはや当たり前になっています。これも彼らに聞かせたら、びっくりすることだろうと思います。

以前、ＮＨＫスペシャルで水の特集をしていたのですが、それによると、世界の水資源のあるところは大手の飲料メーカーが一様に手をつけているそうです。そして「これからの商売は水だ」と言われています。だけど、水をお金で買わなくていけないということは、生きるための最小限の権利もお金に左右されるということですよね。お金がないと、水が買えなくて生きていけない。昔は女の子が生まれたら、嫁入り道具の桐のタンスを作るために桐の木を植えていたようですが、いずれは赤ん坊ができたら、みんなその子が一生飲める分の水が入った貯水タンクを用意しなくてはいけなくなる時代が来るかもしれません。

そのテレビ番組の中でも言っていたのですが、二〇二五年、世界の人口が八十五億人を超えると、人間だけで地球上の絶対的な水も足りなくなるそうです。そうなってくると、どうするのでしょう。それこそ百キロの方がひとりいなくなると、五十キロの方が二人生きられるから、体重百キロを超える人たちにはちょっとご遠慮願う、というような時代になってしまうかもしれません。

三百年前には世界の人口は今の十分の一しかいなくて、六億人だったそうです。それが三百年の間に十倍に増えてしまったということが書いてありました。ぼくの最初の写真の仕事のテーマはたまたま炭

坑だったんですね。そこで思ったのですが、ヨーロッパで始まった産業革命は約二八〇年前で、ちょうど人口が急増し始めた時期とピッタリ一致するのです。これはぼくの勝手な説で、何の科学的根拠もありませんが、石炭と蒸気ポンプの出現によって、それまで高いところから低いところに流れるのが当たり前だった水を、低いところから高いところに上げることができるようになったわけです。そうすることによって、今まで人間が住めなかったところに住めるようになり、ポンプによって水を汲み上げることによって、農作物もできないし、動物も飼えなかった場所で生活できるようになりました。それじゃないかとぼくは思ったわけです。

本来なら人間が住めなかったところに住めるようになったり、畑が作れないところに畑が作れるようになったということは、そこに棲んでいた他の生きものたちを追いやったり、殺してしまうことでもあるわけです。ですから人間はもっと謙虚になってしかるべきなんですね。でも人間はまったく謙虚になっていません。開発という言葉もあります。アメリカには西部開拓時代から「Go west, young man」という言葉があるそうで、ともかく開拓して、町を作って、森をつぶし、生きものを追いやってというように、どんどん人間だけが増えていったわけです。いまは世界中が「Go west, young man」になってしまいました。いま人間にとって一番大切なものは地球にそして全ての生きものたちに対する謙虚さです。たくさんの生きものたちに囲まれて人間は生きられるのです。いまのままだと人間ばかりが増え続けて、二〇二五年には八五億人になるかもしれない。自分たちで自分たちのクビを締めていっている状態ですよね。

お金を信じない

最初の話に戻りますが、アレクセイの村に行くと、本当に暮しの基本に返ることができるような気がします。彼らが「豊かだ」と思う基準というのは、「食べる物がちゃんと穫れる」ということです。お金は信用していません。映画の中にも出てきたように、すごいインフレが続くわけです。一年も経たないうちに、千円が六百円になるようなインフレ率で、ぼくたちも撮影をしているときでも、十ドルを換えると、札束になってしまって、とてもお財布には入りませんでした。

彼ら年寄りたちは六十歳過ぎていますから、社会主義国家的なよさや、またとても独裁的な大統領ルカチェンコの主な票田が年金生活者なので、年金の面で非常に優遇されているんです。彼らの年金は日本円にして二千〜三千円。夫婦でしたら、もう五千円以上あるわけです。それが定期的に毎月支給されています。

けれども、そのお金も持っていたらどんどん価値が下がるので、どんどん使うんです。町に出ていった息子や娘に支給されるとすぐに仕送りをするんですね。彼らは一銭も貯金しない。つまりお金を信じていないんです。だからバブルが起ころうが、どんなことがあろうと、みんな何ともない。どうして平気なのかというと、食べる物を自分たちでちゃんと作っているからなんです。その強さというのはすごいなと思いました。だからこそ、食べ物さえちゃんと収穫できれば豊かだと考えるわけです。ですから、アレクセイの村に行くと、彼らのそういう暮らし方が日本にくらべても真面目に思えてくるんですね。

〝いのち〟をいただく

この村ではいのちが実感できます。ベラルーシの人たちはたいへんにブタが好物というか、いま日本ではなるべく脂身の少ないのが好まれるようですが、ベラルーシでは脂身をたくさんつけるブタがいいブタだとされています。たとえばナージャの村のクルチン夫妻は、ブタを飼うのがとても上手なんですね。あるとき、おばあさんが一生懸命にブタをブラッシングしていました。だいたいブタを屠殺するのは冬なんですが、秋になると面倒見が特によくなるんです。一日に四、五回はブラッシングをするし、好物のドングリや小麦も食べさせる。普段でもじゃがいもがブタの主食で、穫れたじゃがいもの三分の一は人間用、三分の二はブタ用といわれているくらいです。ブタの顔を見て気分がいいかどうかはわかりませんが、いつも秋口になるとブタがニコニコしているように思えました。ぼくたちがブラッシングの様子を撮影しようと思ったら、おばあさんがこそこそと通訳のロシア人に「これだけ可愛がっているんだから、この肉はおいしいよ」と言ったんですね。ブタに聞こえないように、小さい声で言うんです。その通訳する彼も小さい声でぼくたちに翻訳してくれたのですが、ブタはおそらく日本語はわからないから、大きな声で言ってもよかったのではないかと思います（笑）。

「可愛がるからうまい」というのは何なのでしょう。その感性はすごいなと思いましたが、でもそのようなことは、ぼくたちの子どものころにもあったんですよ。

ぼくが小学校の低学年の頃は東京はまだ焼け野原でした。うちの親父はまずニワトリを飼いだしました。父は孵化させるのがとても上手で、よく近所にもヒヨコを分けていたんですが、そのニワトリがわ

が家にいつも十数羽いました。ぼくはそのエサ係で、朝学校に行く前に、また学校から帰ってくるとエサをやっていました。そのときのわが家のタンパク源はその卵と、一カ月に一、二回、卵を産まなくなった雌や大きくなった雄をつぶしたときの肉でした。今のように、ケンタッキーフライドチキンをいつでも食べられるわけではありません。

今でもありがたかったなと思うのは、親父がニワトリをつぶすとき、必ずぼくの学校帰りを待って手伝わせたのです。ぼくは父と一緒に毛をむしりました。ぼくはニワトリに一羽ずつ名前をつけていました。同級生の女の子の名前だったり、いばっているニワトリには校長先生の名前をつけたりして、ペット代わりです。だいたい「卵を生まなくなった○○子ちゃんはそろそろ……」というのは予想できます。案の定、その日は○○子ちゃんの番になって、ぼくたちのごちそうになるわけです。やはり親父が殺すときはぼくもしんみりしましたが、その夜にニワトリの肉のごちそうが出てくると、すっかりそのことも忘れてむしゃぶりつくわけです。母はその夜はぼくに手羽先をいつも焼いて出してくれました。その肉が骨に少しでも残っていると、必ず親父は「ほら、成一が可愛がった○○子ちゃんだろう。しっかり食べるんだぞ」と言うんです。そうすると、ぼくはお肉がちょっとついているのをきれいにかじって食べました。

つまり生きているニワトリと、肉としてのニワトリがちゃんと見えた時代なんですね。そんなことがついこの間まで日本でもあったわけですが、今はそういう関係がどんどん見えなくなってきています。

数年前、秋田の小学校でニワトリを学校で飼って、それをしめて、カレーライスにして食べるという授業があったそうですが、結局は校長先生や教育委員会、ＰＴＡまでが反対して、中止になったという

記事が新聞に載っていました。ぼくはその記事を読んで、「今はたいへんな時代なんだな」と思いました。つまり、ぼくたちの時代であれば、そんなことをひとつのクラスがしたら、別の意味でたいへんですよ。大騒ぎになります。「うちのクラスでもやろう」「やってほしい」と言うだろうし、ひょっとしたら父兄も参加したいと言うかもしれない。だって、みんな肉が食べたくて仕方がないのですから。そういう時代にはいろいろなものが見えたんです。これだけ今のように飽食の時代になってしまうと、学校の先生もたいへんでしょう。残酷だとか、生徒に与える影響が多すぎるとか、いろいろな意見を言われます。ぼくたちの時代はみんなが肉に飢えていたのですから、いくら可愛いニワトリの○○子ちゃんだって、やはり食欲のほうがまさるわけです。

そういう光景をベラルーシの村々でたくさん見ることができました。こうしたことをやはりぼくはみんなに見せたい、知らせたいと思いました。これからますます新しいものが出てきて、ぼくたちの暮らしは物質的にはさらに豊かになると思います。だけど、一番肝心な「人間は命あるものだ。そして人間だけでなく、地球の中のいろいろな命のあるものたちと一緒に生きていかないと、人間の命だって決して安泰ではない」ということを、あの村に行って、皆さんにも見ていただきたいと思っています。

①右にある四角い二つの白いものが泉です。映画をご覧になった方はわかると思いますが、左側から湧いて、右側のところで洗濯をしたり、洗い場になります。

②このバスが七十キロ離れたチェチェルスクの町から、週に二回通ってきます。町を出て行った息子たちにはみんなこのバスに乗って会いに行きます。

③アレクセイの家の馬です。この村では今も馬がいないと、成り立たないんですね。だからみんな歳取って、馬を持てなくなると、農業もたいへんです。アレクセイはそういう年寄りたちの面倒をみながら過ごしています。

④泉の木枠が腐ってしまっているのです。女たちは洗濯にも困るから、早く修理してくれと男たちに頼んでいたのですが、男たちはこの村で後何年暮らせるかわからないと言って、修理をしてくれませんでした。

この年の秋に何年かぶりで町から司祭がやってきて、そこで収穫祭の礼拝をするということが決まり、急に男たちもやる気になりました。主にこの五人衆が修理を始めました。平均年齢 71 歳。たいした男たちです。

⑤収穫祭の礼拝です。若い司祭が、この泉でからだと心を浄めてほしいとしきりに言っていました。司祭が持ってきたイコンはチェルノブイリの悲劇をテーマにしたイコンでした。

⑥収穫祭には隣村からもアコーディオン奏者も参加して、何年かぶりのにぎやかな祭りになりました。

⑦洗濯物もこうやって天秤棒で担いで、泉で洗濯します。

⑧週に二回来る移動売店です。村人は年金で塩や酒、バターなどの日常品を買いそろえます。村人たちが唯一現金を使う時。そして残ったお金は町に引っ越した息子や娘たちに送ります。

⑨握手したりダンスしたりするたびに村人たちの手のごつさに驚きます。そして自分の手が恥ずかしくなります。彼らにとって手は道具の一部なのです。『イワンのバカ』にもありますよね。イワンの王国ではその人の手を見て、マメがあるか無いかでご馳走するかどうかを決める、と。

⑩撮影の合間に彼らのじゃがいもの収穫を手伝いました。でもつい、軍手などを使ってしまうのです。すると村人は笑いながら、「手袋していたら、ミミズがどのくらいいるか分からないし、小石とじゃがいもの区別がつかないよ」と言い、ぼくたちも軍手をやめて素手で掘り出しました。何だかとても新鮮でした。土の感触というか、裸足で土の上を歩くと、何となく「あれ？」と、自分の中にも土の感覚が残っていることがわかりました。

質疑応答

Q1　学生A（理工学部）　私は六年ほど前に、神奈川県の青少年派遣で、タイ北部の少数民族の家に泊まり生活する機会をもちました。そのときに、これまでの自分の生活では考えられないような、電化製品もないような暮らしを通して、物資の豊かさと心の豊かさとは同じものではない。便利な生活をしているからといって、心が豊かな生活しているとは限らないかもしれない、と感じました。本橋さんのお話しをうかがい、そのときのことを思い出しました。さて、本橋さんが写真を撮ろうと思ったきっかけというのは何だったのでしょうか。

A　今思うととても恥ずかしいのです。ぼくは写真の学校の卒業制作ではより悲惨な写真を撮れば卒業できるのではないかと思い、筑豊の炭坑に行きました。そこで出会ったいろいろな人たちのお蔭で悲惨な写真ではなく、大切なことはそれ以前にどう付き合うかということに気が付いたのです。でも、若いときに「これをやろう！」と思ったきっかけなんていい加減なものではないでしょうか。ですから「いい加減でも始めればいいじゃないか」とぼくは若い人にはよく言っています。

Q2　学生B（理工学部）　理工学部で勉強していると、科学技術の向上＝人類の発展や平和であると信じて疑わなくなります。しかし、今日のお話しを聞き、本当にそうなのかと思いました。科学技術を考えていく人間として、おさえておくべきポイントや忘れてはいけないことなどはありますでしょうか。

A　バランスだと思います。科学や技術によりいろいろなものが発達して、人間の心とからだがついていくかどうか。それがついていかないと、どんどんチグハグになっていくんだろうなと思います。ぼくたちは生きものですからね。ぜひ、科学技術と人間の心とからだを離れないようにいろいろなものを勉強して役立ててください。

Q3　学生C（経済学部）　私は趣味で写真をやっています。六十年代に出された写真集『炭鉱〈ヤマ〉』を初めとしたいろいろな作品を拝見しました。先生は写真集制作に当たって、社会的な状況を背景に人びとの暮らしや豊かさとは何かとはということを追い続けていらっしゃると思います。初期の作品から見ると、最近の作品は画面がどんどん静謐になっているなと思います。たとえば『炭鉱〈ヤマ〉』には良い意味での泥臭さが出ていると思います。人間に対するアプローチが変わってきているのか、というのが一つ目の質問です。二つ目は、映画という媒体を始めようと思われたきっかけというのは何でしょうか。

A　そうですね。『炭鉱〈ヤマ〉』という写真集を見ていただき嬉しく思います。これは二十二歳頃の作品で、その分だけ乱暴な部分もあったと思います。当時は、平気で図々しく、会いたい人に会いに行ったり、ぼく自身もいま『炭鉱〈ヤマ〉』を見ると随分乱暴な撮り方をしているなあと思います。ただその乱暴さが許された歳だと思うんですね。これが五十、六十歳になってできるかというと、できないでしょう。それが若さの特権だし、そこで何かを得るということは大切です。年齢とともにそういうことができないかわりに、何かを一枚、一枚はがしたところを写すようになりました。あまり自分の写真の

ことで解説はできませんが、いま思い返すと、おそらくそういうことではなかったかなと思います。そうした変化が作品に出てきているのではないかと思います。

そして、映画を撮るようになったのは、やはり映画は動くものですし、おもしろいんですよね。写真は止まっているものでしょう。一枚の写真で、「ある人が笑っていたのが、突然怒った」というのは撮れなくはないけれど、難しい表現です。それが映画だったら、撮れるのです。それから音があります。それはおもしろいですね。写真というのは一瞬一瞬の切り取ったものを組み合わせて見てもらうものですし、映画は時間の流れを選びながら、それを構成して見てもらう、そういう違いがあると思います。音楽でも、絵画でも、文学の世界にしても、いろいろなものにはそれぞれ得意の表現力があります。写真と映画は同じように見えて、表現力がずいぶん違っているという点が実におもしろいことでした。